司馬遼太郎が描いた新選組 ―沖田総司を中心に―

古川友恵

一、はじめに

司馬遼太郎（一九二三-一九九六）は本名を福田定一といい、かつては産経新聞社の記者であった。一九五六年に司馬遼太郎の筆名で書いた『ペルシャの幻術師』[1]が第八回講談倶楽部賞を受賞し、その後小説を本格的に書き始めた。一九六一年には産経新聞社を退社して執筆活動に専念し、多くの長編小説や短編小説、エッセイ、紀行などを書いていった。

一九六〇年代には新選組にまつわる数々の小説を書いた。一九六二年五月から一九六三年十二月には『小説中央公論』で『新選組血風録』が連載された。『新選組血風録』は幕末の新選組を題材とした連作小説集である。全十五話であり、一話ごとに主人公を変えながらその多様な人物の個性豊かな造形を通し、新選組という組織の実態を浮き彫りにさせる短編連作形式をとっている。『新選組血風録』（中央公論社　一九六四年）、『司馬遼太郎全集』第七巻（文藝春秋　一九七二年）、『新選組血風録』（中公文庫　一九九六年）、『新選組血風録　新装版』（角川書店　二〇〇三年）に収録されている。

この作品を筆頭に、一九六二年八月に『文芸朝日』で短編小説「理心流異聞」[2]を発表し、同年十一月には『週刊文春』で長編小説『燃えよ剣』[3]の連載が始まり、新選組を主人公とした作品を次々と発表した。更に、この年代には「ああ新選組」（『週刊文春』一九六一年九月十八日号掲載）、「新選組」（『中央公論』一九六二年五月号掲載）など、幾つもの新選組に関するエッセイも書いていった。

そして、司馬の新選組作品は今日広まっている新選組のイメージの形成に影響を与えた。特に沖田総司の一般的な人物像は、司馬の小説の影響が大きいと言われている。

そこで、『新選組血風録』を中心に、司馬の歴史小説の

特徴を踏まえつつ、作品に出てくる新選組の人物像をどのように描いていったのか、そして司馬の新選組作品が後代にどのような影響を与えたのかを考察していきたい。

なお、本稿の『新選組血風録』の本文の引用は全て『新選組血風録　新装版』（角川書店　二〇〇三年）に拠るものとする。

二、歴史と小説

二-一、歴史小説とは

まず、「歴史」とは事実を語るノン・フィクションであり、「小説」は虚構を創出するフィクションである。それぞれ、表現手段が叙述であるものの、歴史は出典を明らかにする必要があり、推測はなされるが、基本的に空想は許されない。それに比べ、小説は作者の自由な発想を基に書かれ、原則として人間の娯楽のために制作される。

歴史小説は「歴史」と「小説」の複合概念から成立している。しかし、小説とは虚構によって「文学的真実」を表現したものであり、歴史小説といえども「小説」であって「歴史」ではない[4]。歴史上の人物を登場させ、その業績や運命を描き、作者は読者が好むように、面白く感じるように歴史的事実と解釈を展開していく。

本邦の歴史小説を語る際に忘れてはならないのが、森鷗外（一八六二-一九二二）の存在である。鷗外は明治期・大正期の小説家で、一九一二年の乃木希典の殉死をきっかけに歴史小説へ転換し、やがては史料や史実に基づきながら作者の心理を付加させる新しい史伝の方法を用いて「古今に比なき大文章」と称賛された[5]。鷗外によると、歴史小説は二傾向に分かれる。これは鷗外が自身の「歴史其儘と歴史離れ」[6]という評論で言及している。この評論によると、歴史小説は史実を尊重して忠実に再現する「歴史其儘」と、史実を変更して作者の想像を加える「歴史離れ」に分かれる。前者では史実を無視することや捻じ曲げることは許されないが、後者では史実を取捨選択して登場人物に対する作者の思想や感情の付加などの脚色をすることが可能となる。

総じて明治期の歴史小説は若干の優れた作品を生み出しはしたが、その全体的完成を見ずに大正期を迎えた[7]。そうした中、鷗外は「明治末年の思想上の苦悩と自己韜晦（とうかい）をへて、わが国における本格的な歴史小説の領域の開拓者となった」[8]と言われている。

その後、大正後期には所謂大衆文学としての時代小説が生み出される。歴史の真実を追求する歴史小説に大衆性が問われるようになったのは、昭和期に入ってからだった。このように、歴史小説は時代と共に発展・変遷を辿ってき

たが、戦後その領域に大きな貢献をしたのは司馬遼太郎であった。

司馬の小説の具体的な特徴は、次の節で述べる。司馬の小説は歴史書として受け止められるほど実証性が高いものであり、司馬は作中で述べられた出来事について史実通りなのかと質問されたり、歴史の話をしてほしいと頼まれたりしていた。このことは司馬の「小説と歴史について」(『高知新聞』朝刊　一九六七年一月二十二日掲載)というエッセイに書かれている。司馬は「小説はそういう質問をうける性質のものではない」とし、歴史の話をしてほしいと頼まれても断っていたという。あくまでも小説家として、歴史に題材を得ながら自由な発想と創意で書いていたと言える。また、同書では次のようにも述べていた。

私は小説家であり、そのかぎりにおいて他の職業人と同様職業的自負心はもっているが、歴史家の栄光は背負っていない。両者は地球の裏と表ほどに距離のはなれた分野であり、その両者の精神が住んでいる場所もまったくちがう世界である。(中略)私の場合は、小説家には歴史を曲げる権利はないとおもっている。歴史は国民の共有財産であり、いかに小説であってもそれを勝手に変形していいものではないであろう。

司馬は「歴史」と「小説」は全く別の領域であるため、歴史家と小説家の立場をはっきりと分けなければならないとしていた。そして、それを踏まえた上で創作活動を行い、相手の領域を侵害してはいけないと意識していた。

つまり、司馬は自分の作品は「小説」であるため、書いた内容が史実通りではないという文句は受け付けないと考えていた。また、司馬の作品には架空の人物も登場する。それゆえ、司馬の作品は鷗外の言う二傾向の内、「歴史離れ」に当てはまる。しかし、司馬は小説家つまり自分には歴史を曲げる権利はないとも言っていた。小説家という立場に立ちながらもどうしてここまで史実に拘っていたのかについて、司馬の小説の特徴や小説を書くにあたって現代でなく過去を題材に選んだ理由などと関連させて考察していきたい。

二・二、司馬の小説

司馬の小説は、歴史上の人物の行動に焦点を当て、史料を基に独特の歴史的・倫理的解釈をつけて書き、新聞記者出身らしい明瞭な語り口でテンポよく素描されている。その際、歴史上の人物にただ歴史的役割を果たさせるだけでなく、史料では得られないような、その人物の日常の些事

にわたる部分まで描いて作品の中で生かしている。

また、「余談」のような独自の手法も魅力の一つである。「余談だが」という前置きをして物語中の出来事に関するエピソードを書いたり、登場人物と縁のある人とのやりとりや訪れた土地の描写などの司馬自身の体験談を適度に物語内にちりばめていったり、司馬が「筆者」として作中に出てきたりする。『新選組血風録』でも「油小路の決闘」や「虎徹」、「胡沙笛を吹く武士」、「海仙寺党異聞」、「槍は宝蔵院流」、「四斤山砲」などの話で「余談だが」と言って補足を加える場面が幾度もあった。「沖田総司の恋」でも、「筆者の余計な差し出口だが」（p.428）と物語の途中で司馬が顔を出したり、沖田総司の研究家の森満喜子が沖田の墓碑を見たことも述べたりしている。この「余談」によって、読者の理解を補助すると共に物語に深みをもたらしている。

このような、客観的な視点から歴史の大局的な叙述とともにゴシップを多用し、筆者独特の解釈を織り込む随筆風の手法で過去の人物を素描していく小説形態は、それまでの日本の歴史小説から見れば異質なものであった。

そして、司馬は膨大な量の史料を基にリアリティを追求しており、実証性の高さにも定評がある。『新選組血風録』では、登場人物の生い立ちや事件の状況、京都の町並みといった細かいところまで史料に基づいて描かれている。司馬がここまで忠実に再現しようとしていた理由は、『手掘り日本史』（毎日新聞社　一九六九年）に収録された「歴史のなかの日常」というエッセイから窺うことができる。

> 私は、ひとつのことを書くときに、その人間の顔だとか、その人間の立っている場所だとか、そういうものが目の前に浮かんでこないと、なかなか書けないのです。（中略）歴史小説を書くときのデテールの問題ということになりましょうが、やはりその当時の人間が生きていた日常を、作者が同じように生きてみるということになりましょうか。歴史を見てゆくうえで、どうもこれは大事だとおもいます。

司馬はその時代の雰囲気や当時の価値観を掴めなければ小説が書けないようであった。実際に存在した世界をできるだけ小説の中で再現しようとしていた。同書では「それはどの作家もそうなのでしょうが、私の場合はとくにそれがはげしいようなのです」とも述べていた。つまり、司馬は小説を書くにあたって、まず「歴史」を知らなければならなかった。史料を渉猟し、その史実を繋ぎ合わせてできた世界を舞台にして、自分の作品を創り上げていったので

ある。また、先に挙げた「小説と歴史について」というエッセイでは、史料を調べることは娯楽に値し、「想像の刺激剤」であるとも述べていた。「歴史」は司馬にとって創作意欲を高めるものであったのである。

そもそも、司馬はなぜ過去の世界を描いたのだろうか。その理由は、「なぜ、私は歴史小説を書くか？」〈後に「歴史小説を書くこと」と改題〉（『日本読書新聞』一九六五年五月三十一日）というエッセイから窺うことができる。

> 某という人物その人生というものは、その某の人生が完結したあと、時間がたてばたつほど、私にとって好材料になるようである。時間が経たねば、俯瞰ができない。俯瞰、上から見おろす。そういう角度が、私という作家には適している。たとえばビルの屋上から群衆を見おろし、その群衆のなかのその某の動き、運命、心理、表情を見おろしてゆく。この俯瞰法（つまり歴史小説をかく視角）で某を見るばあい、筆者は某そのひと以上に某の運命とその環境、そしてその最期、さらには某の存在と行動がおよぼしたあとへの影響、というものを知ることができる。（中略）人間にとって、その人生は作品である。この立場で、私は小説をかいている。裏返せば、私と同時代の人間を（もしくは私自身を）書く興味をもっていない。理由は、最初にいったように「現代」では人生が完結していないからである。

司馬は登場人物の運命やその人物が知り得なかったことなど、第三者が知ることのできるものを描くことを好んでいた。この「完結した人生」を扱うことによって登場人物達を見下ろせる超越的な立場が合っていたのである。このような立場が作中では「余談」や筆者の顔出しにも繋がっていたのだろう。また、この「完結した人生」については、「私の小説作法」（『毎日新聞』朝刊　一九六四年七月二十六日掲載）というエッセイでも語られている。このエッセイによると、完結した人生が好きだと言っても、「みるだけでは、感動しない」という。司馬は俯瞰法によって自分が見ている人間と、その人間の人生を交差させてみたら何が起こりうるかと考えることが楽しく、「この楽しみがあって、やっと小説をかく気になる」と述べている。司馬が「歴史」を題材にしていた理由は、「完結した人生」だと俯瞰することができ、そこに自分の想像を加えることを好んでいたからだと考えられる。

小説家には歴史を曲げる権利はないと司馬が主張していたことは先述したが、作品では自分の想像を加えており、

一見主張と行為が矛盾しているように見える。しかし、歴史の状況の中で起こり得ないフィクションを加えたり、登場人物達の業績や運命を大きく書き換えたりすることはしなかった。つまり、司馬は歴史的事実に基づいて、史料から得ることのできない歴史の空白部分を自分の想像で補っており、歴史小説を書くことによって歴史を曲げてしまうということはしていなかったと考えられる。

また、司馬は歴史小説家として知られているが、現代小説も書いたことがある。「兜卒天の巡礼」（『近代説話』一九五七年十二月号掲載）、「豚と薔薇」（『週刊文春』一九六〇年七月十八日から八月二十二日まで連載）、「古寺炎上」（『週刊サンケイ』一九六一年十一月二十七日から一九六二年一月一日まで連載）の三作品であり、いずれも現代を舞台にした推理小説である。しかし、『豚と薔薇』（東方社　一九六八年）のあとがきによれば、推理小説は書くように要請されてようやく書いたものであり、「生涯書くまい」と述べていた。半強制的に書かされ、司馬は書いたことを後悔していた。司馬が好んで書いたのは、現代ではなく過去の世界の方だったということが窺える。

したがって、歴史小説というジャンルは俯瞰法を用いて「完結した人生」を書くことができ、司馬にとって好適なものであった。そして、ただ歴史的事実を書いていくだけでは面白くないと考え、史料では分からない部分に関して、この人物がここでこのようなことをしたらどうなるかと想像し、それを「小説」として描いていった。しかし、小説を書くためには、まず「完結した人生」つまり「歴史」を知らなければならなかった。歴史上の人物がどのような人物だったのか、どのような場所にいたのか、どのような運命を辿ったのか細かく知らなければ書くことができなかった。少なくとも司馬にとって、歴史を知ることは小説を書くにあたって創作意欲を高めるための予備運動であった。だからと言って、その歴史を決して曲げるようなことはあってはならなかった。そのため、司馬は小説を書く際、歴史上の人物が生きていた日常を自分も同じように想像できるよう、そして歴史を曲げることのないよう、「小説」でありながらも「歴史」を重視していたと考えられる。

三、司馬が描いた新選組の人物像

三・一、子母澤寛の新選組三部作との関連

司馬は新選組を調べる際、子母澤寛の『新選組始末記』（万里閣書房　一九二八年）を避けることができず、子母澤を訪れて参考にさせてもらう許可を貰っていた。司馬が子母澤と対談した際、次のように述べた。

私は新選組を調べていましたとき、子母澤先生の『新選組始末記』がどうしても越えられない。あれを最初に読みましたとき、私はまだはたち過ぎでしたが、非常に鮮やかな驚きを覚えました。（中略）私が新選組のことを書こうと思ったとき、これはどうしても『始末記』を離れられない。ですから先生のところに来て、あれをひとつ使わせていただきますと……

（「幕末よもやま」『中央公論』一九六七年八月号掲載）

『新選組始末記』は小説ではなく、新選組という歴史的存在を子母澤が実際に取材した記録である。子母澤は新選組に縁のある土地の訪問や聞き取りといった現地取材を行い、丹念に情報を集めていくという民俗学的手法に似た方法で書き上げた。当時はまだ新選組を知る人達が存命していたため、このような実地踏査を行うことができた。この取材記録は虚構がかった話も含め、新選組の実態を伝える格好の記録となっている。

司馬はこの対談で子母澤のことを「新選組という、いまは幻のようになっているものを、その痕跡、その他少しでも生き残っているものがあれば、一つずつ採集して回られた。」「採集しただけでなくて、その選択がえらく働いております」と述べて絶賛した。『新選組始末記』はそれほど新選組についての情報が豊富であり、司馬もこの作品に依拠していた。

『新選組血風録』においても、「池田屋異聞」で新選組隊士の山崎蒸の栄達の理由を述べる際や「三条磧乱刃」で隊士の井上源三郎の説明をする際、子母澤寛の『新選組遺聞』（万里閣書房　一九二九年）より、子母澤が新選組と関わりのあった八木為三郎を訪ねて聞いた懐旧談「八木為三郎老人壬生ばなし」を引用している。このことからも、司馬が新選組の小説を書く際には、子母澤が集めた新選組の記録を参考にしていたことが窺える。

そこで、子母澤の新選組三部作とされる『新選組始末記』、『新選組遺聞』、『新選組物語』（鱒書房　一九五五年）等と照らし合わせ、司馬が新選組の人物をどのように描いていったのかを見ていきたい。具体的には、それぞれの人物に関して、子母澤の新選組三部作で書かれている特徴を挙げ、司馬の『新選組血風録』ではどのような人物として描かれているのかを述べていく。

まず、『新選組血風録』に一貫して登場する新選組局長の近藤勇と副長の土方歳三を見ていく。

子母澤の新選組三部作に見られる近藤の特徴は、「いつもにこにこ」していて「物優しいいいところ」があり[10]「無駄口は利かず立派な人[11]」であった。また、試合の相手に

は手厚くもてなすなど、礼儀正しいところも見られる。『新選組血風録』では、それらの特徴に加えて、不器用で己の信念を曲げることのない頑固者だが、新選組を引っ張っていく将器が備わっていた人物として描かれた。

土方は、『新選組始末記』によると、「なかなかの美男子」で、「優しい男」であったが「後年はなかなか尊大な態度になった」という[12]。『新選組血風録』では、俊敏な策士で、組織のためなら手段を選ばず、隊士達には局長の近藤よりも恐れられる人物であった。

新選組の顔として表に立つ近藤に対し、土方は裏で新選組の運営や人事といった細かい仕事を行っていた。司馬は彼等の特徴を踏まえながら、新選組を担う者達として人間味のある人物として描き出した。

次に、『新選組血風録』の各話で登場した主要人物を見ていく。

一番隊組長の沖田総司は、子母澤の新選組三部作によれば、「剣法は天才的の名手[13]」であり、「よく笑談(じょうだん)をいっていて殆んど真面目になっている事は[14]」なく、「隊中一の軽口の面白い明るい男[15]」であった。更に、女遊びはせずに、子供とよく遊んでいたそうだ。『新選組血風録』における沖田の人物像は次の節で詳しく考察するが、子母澤による記録と重なる部分が多い。

二番隊組長の永倉新八は、「隊中にあっても五指に屈する一流の剣客[16]」と、『新選組物語』に記述されている。『新選組血風録』でも新選組で一、二を争うほどの剣の達人として描かれており、更に他人に深入りすることを望まない淡泊な性格の人物として描かれている。

三番隊組長の斎藤一は、『新選組始末記』によると、「組の中でも一流の剣客」であるが、「少し酒を飲むと、人を斬りたくなる癖」があったという[17]。『新選組血風録』では剣の腕が立つにも関わらず驕ることもなく、屈託のない良い人として描かれている。

六番隊組長の井上源三郎は「ひどく無口な、それで非常に人の良い人[18]」と『新選組遺聞』に書かれており、司馬はこの記述を『新選組血風録』でも引用している。更に作中ではこの特徴に加えて、飄々としているが、闘いでは死勇をふるい、黙々と仕事に取り組む実直な人という印象が受けられる。

新選組の組長ともなると、やはり剣術の腕の記述が目立つようであり、性格や人柄に触れている記述は新選組三部作にはなかなか見られない。しかし、司馬は新選組三部作に書かれている局中での出来事や伝承を基に、彼等を人間味溢れる人物として生き生きと描き出している。

次に、近藤達と敵対することになった隊士達を見ていく。

芹沢鴨は『新選組始末記』によれば、「短気で我儘で、乱暴で、一廉（ひとかど）の人物には相違ないが、扱いかねる事が度々であった[19]」という。『新選組血風録』においても、著名な剣客であるのだが、市中乱暴を繰り返して忌み嫌われていた。

谷三十郎は、新選組三部作によると、「種田宝蔵院（たねだほうぞういん）の槍をとっては大した腕前[20]」であったが、自慢癖があったという。更に、切腹の介錯で失態を犯したという話[21]もあり、このエピソードは『新選組血風録』でも取り上げられている。この作中での谷は陽気で素朴な出世欲があるかと思えば、変に屈折していて随分厄介な人物として描かれていた。

五番隊組長の武田観柳斎は、『新選組始末記』によると、「兵法をやる上になかなか文才」があったのだが、「おべっか振りが、余程はげしい人物」であった[22]。『新選組血風録』においても、軍法の知恵は大したものであったのだが、倨傲で同僚以下に対しては冷たい人とされていた。

しかし、彼等はただ近藤達の敵役としてのみ小説に登場した訳ではない。『新選組血風録』での芹沢は「つくづくこどものよう」（p.78）「いちばんの善人かも知れない」（p.78）と沖田に言われ、谷は「別にわるい男じゃない」（p.508）と斎藤に思われていた。武田に関しては死に際に「度胸がすわってしまえば、人変りがしたかと思うほどにみごと」（p.224）と称された。彼等は新選組の内部抗争で死んでいった人達であり、決して根っからの悪人ではなかった。

子母澤の新選組三部作は新選組の実態を伝えるものとして、その人物の善し悪しも含めてありのままを記録している。それと比べると、司馬の描いた人物の悪事はあまり描かれておらず、比較的良い印象の方が残る。更に、作中で殺された人達も決してただの悪人として描かれた訳ではなかった。司馬は彼らのことを、一人間として、彼等なりの立場に立った倫理や考え方があり、それぞれの生き方があったということを描き出したかったと考えられる。

このように、新選組の隊士達は史実を基に各々の特徴を生かして個性豊かに描かれている。したがって、司馬は子母澤の作品を踏まえた上で、新選組の一人一人に焦点を当て、それぞれの人間像を作り上げながら描き上げていったと言える。

三・二、沖田総司の人物像

第三章の第一節で述べたように、司馬は新選組を描く際、子母澤の新選組三部作を参考にして独自の人物像を作り上げていった。その中でも、沖田総司に関しては司馬が後代に与えた影響が大きい[23]と言われている。そこで、本節では沖田総司の人物像について更に詳しく考察していく。

子母澤の新選組三部作から伝えられる沖田の素性は第三章の第一節で述べた通りである。史料から読み取れる沖田の人物像はどうであろうか。沖田の史料は近藤勇や土方歳三に比べて非常に少なく、実像もはっきりしない。沖田の経歴については、司馬の『新選組血風録』の「菊一文字」で沖田家文書が引用されている。沖田家文書とは、「昭和二年（一九二七年）に誕生し、平成十五年に七十六歳で亡くなった沖田勝芳の記述によるもの[24]」である。これは漢文体で書かれたものであるが、本稿では『新選組血風録 新装版』（角川書店　二〇〇三年）に司馬が採録した形で引用する。

沖田総司房良（かねよし）、幼ニシテ天然理心流近藤周助ノ門ニ入リ、剣ヲ学ブ。異色アリ。十有二歳ニシテ、奥州白河阿部藩指南番ト剣ヲ闘ハセ、勝ヲ制ス。（p.600）

総司、幼名総（宗・惣）次郎、春政、後ニ房芳ト改ム。文久三年新選組成ルヤ、僅カニ二十歳。新選組副長助勤筆頭一番隊組長トナリ、大イニ活躍スルトコロアリ。雖然（シカリトイエドモ）、天、藉（カ）スニ寿ヲ以テセズ、惜イカナ、慶応四年戊辰（明治元年）五月三十日病没ス焉。（p.628）

これらの文書からは、沖田は剣の達人で、新選組の一番隊組長となって活躍し、若くして亡くなったことしか分からない。やはり、沖田の性格や人柄などについては子母澤の新選組三部作を参考にしていると考えられる。しかし、沖田の史料が少ない事からも、作中に描かれている沖田には司馬の創作が加えられていると考えなければならない。

それでは、司馬は沖田をどのような人物として描いたのだろうか。司馬の作品に描かれている沖田の特徴の中で、顕著に見られるものを中心に考察していきたい。『新選組血風録』で沖田が初登場した場面では、次のように述べられている。

沖田は天然理心流の免許皆伝者で腕は近藤、土方よりも立ったが、年がわかく、しかもふしぎな若者で、どういうときでも明るい童子のような相貌をしている。（p.57）

前にも述べた通り、剣術の腕が優れていることは明らかだが、注目したい点が後半の「ふしぎな若者」と「明るい童子のような相貌」である。これらの表現は史料や子母澤の新選組三部作には見られない。

沖田は作中で度々「ふしぎな若者」や「奇妙な若者」と

表現され、他の隊士達とは違う存在である描写がされていた。「芹沢鴨の暗殺」という話では、近藤と土方による新選組の陰謀のために芹沢を暗殺する際、沖田は「芹沢さん可哀そうだな」（p.93）と言いながら、この暗殺に一番熱心だった。この矛盾については土方にも理解できないと述べられている。また、乱暴で悪いイメージしか与えられていない芹沢を「つくづくこどものよう」（p.78）、「いちばんの善人かも知れない」（p.78）と言い、他の人と違った感覚を持っていることを読み取ることができる。かつての仲間に情けをかける心を持ち合わせている一方で、容赦なく暗殺する沖田の存在は、近藤や土方でさえも理解できるものではなく、「ふしぎな」存在であったと言うことができる。

次に、「明るい童子のような相貌」については、「沖田総司の恋」という話において、沖田が医者の半井玄節の所へ行った場面で、「沖田は、ぱっと陽が射すように微笑」い、半井の娘のお悠に「なんだか子供のようなひとだ」（p.439）と思われていた。また、「菊一文字」では近藤には「子供のようなやつだ」（p.604）と言われていた。そして、「芹沢鴨の暗殺」では「沖田は相変わらず子供のようなことをいう」（p.89）と土方に言われ、「長州の間者」では祇園会の宵山で「子供のように眼をかがやかせ」ており（p.137）、「池田屋異聞」では、攘夷志士が密談している池田屋へ乗り込む際、沖田の「子供っぽい微笑が、隊士を奇妙なほど落ちつかせた」（p.179）と描写されている。これらの描写からも見た目だけでなく、普段から子供っぽい行動をとっていることが読み取れる。また、子供のような仕草だけでなく、剣術錬磨者にありがちな偏執者的性格を全く持っていないことに対し、土方は「総司は、生れたままのような男だ」（p.600）とも言っていた。沖田は新選組にいた頃にはすでに二十歳を超えていた。二十歳を超えていながらも純粋な青年という印象は、見た目だけでなく剣術にも表れていた。更に沖田は「子供のよう」だと言われているが、剣術の腕は近藤達よりも優れていた。見た目や中身は子供らしく、純粋なイメージを持つ反面、新選組の誰よりも強かったというギャップが特徴的であると考えられる。

更に、司馬の作品に見られる沖田の特徴は他にもある。「沖田総司の恋」で、沖田の姉のお光に読んでもらった唐詩に鮮やかな情景を思い浮かべたこと、新選組が京都の人達に良く見られていないことを敏感に感じ取っていることなどから分かるように、沖田は繊細な人物として描かれている。また、「欲というものを置きわすれてこの世にうまれてきたような若者」（p.430）と表現された。作中では盲人である土方の長兄の為次郎に「総司のやつの声をきくと、おらア、物哀しくなるんだよ」（p.431）と言われていた。こ

の「物哀しい」とは陰気な声を示しているのではなく、明るすぎるほどの声という意味であり、この声には「性根のあく」がない。つまり、無欲なのである。盲人特有の過敏さで沖田の無欲さを表現している。また、恋心を抱いた町医者の娘をただ「遠眼でみているだけでよかった」（p.468）と涙を流したことからも欲張ろうとしないことが読み取れる。ちなみに、沖田が医者の娘と恋仲であったのは史実である。近藤勇の甥の勇五郎は「新選組の人達は、相当女遊びをしたようでしたが、沖田は、余りそんな遊びをしなかった代りに、京都で、ある医者の娘と恋仲になったのです。」「しかし勇は、自分達の行末を考えていたためか、或時沖田へしみじみと訓戒して、その娘と手を切らせ、何んでも、勇自身が口を利いて堅気の商人へ嫁入れさせたとの事でした。」「沖田は、よく私へこの娘のことを話していました。ふだんは無駄口ばかり利いている男ですが、この娘のことになると、涙を落して語ったものです」[25]と述べた。淡く悲しく描かれる沖田とお悠との恋は、このわずかな談話が基になっている。沖田が近藤達の思いやりともお節介とも言える行動に何も言えず、音羽の滝に行く小説の幕切れは、一編の恋物語として余情あるものとなっており、この悲恋を通して、沖田の繊細さと無欲さを際立たせている。

また、沖田は誰からも好かれる好青年であった。「菊一文字」という話では、刀屋の道伯から当主、番頭、手代、小僧に至るまで評判が良く、新選組だけでなく町の人達からも好かれていることが読み取れる。道伯が新選組の屯営に呼ばれ、沖田が道伯の刀を大事にし過ぎて敵から逃げたという話を聞いたとき、次のように発言した。

「沖田様らしくもない」

道伯は、溶けるような微笑をうかべた。本心、道伯にすれば、らしくないどころか、そういう心働きの仕方がいかにも沖田総司らしくてうれしくてたまらないのである。（p.616）

「沖田らしい」とはどのようなことなのだろうか。沖田は陸援隊隊士の戸沢鷲郎に出会ったとき、道伯から借りた菊一文字則宗を傷付ける訳にはいかないと思い、戦わずに逃げてしまった。道伯は新選組一番隊組長ともあろう方が刀に呑まれて抜かずに逃げてしまったことに対して「沖田様らしくもない」と発言したのだろうが、内心では人から借りたものだからと道伯のような他人にも気を遣ってくれたことが、「いかにも沖田総司らしくて」嬉しかったのだろう。新選組であろうと驕ることなく人に気を遣う優しさが沖田らしく、町の人々からも好かれていたのである。

そして、沖田が病気で早く死んでしまったことは沖田家文書からも分かることだが、司馬の小説では、沖田の死に対する考えや覚悟などが描写されている。沖田は自分が労咳に侵され、寿命がそう長くないことに気付いていた。「沖田総司の恋」でも労咳の記述はあったが、沖田の死に対する考えが読み取れるのは「菊一文字」である。近藤は「死に対して悟りきった」(p.619)と言っているが、沖田には殊更な悟りという言葉は該当せず、本人もできるだけ死を考えないようにしていた。これは、沖田は死んでもよいと悟っていると言うよりは、自分に訪れる死を受け入れていると言った方が良い。つまり、死にたい訳ではなく、自分の死という変えられない宿命に従おうとしていると考えられる。また、死期が近いからこそ芽生えた感情もある。菊一文字則宗は様々な人の手を渡って七百年も生き続けた。所持者は皆死んだが、則宗だけは「生きる価値を天からあたえられて生きつづけているよう」(p.620)だった。沖田はこのことに関して、近藤や土方には分からない感動を覚えていた。死という人間に与えられた天命に気付いている沖田だからこそ、生きろという天命を与えられた則宗に感動したのだろう。長く生きられない沖田と、七百年も生きてこれからも生き続けるであろう則宗との対比が、沖田の儚さを強調している。

これらの特徴は他の新選組隊士には見られず、「ふしぎな」と表現された人物は沖田だけであった。他の隊士達を比べて見ても、沖田は特殊な存在であったことが読み取れる。

以上のことから分かるように、沖田は新選組の中で一際目立つ存在であった。幕末の殺戮集団の中にいたとは思い難い子供のような相貌で、底抜けに明るく、気の優しい男であり、様々な人から好かれていた。更に、局長の近藤や副長の土方よりも強く、誰よりも人を斬ることに熱心だった。情に厚い一方で人を斬ることにも容赦しない二面性を持っており、純粋なイメージとギャップのある残酷さを兼ね備えていた沖田は、正に「ふしぎな若者」であったと言える。しかし、労咳に侵されて剣の道も阻まれてしまい、誰よりも強かった沖田は、戦場ではなく畳の上で若くして死んでしまった。新選組の主要隊士の中で、病気で早く亡くなった者は沖田以外には見られない。若いながらも、このような運命を受け入れていた沖田は周りの者達から見ても、「ふしぎな」存在であったと言える。司馬は沖田を新選組の中で異質な存在であり、薄命や悲恋といった悲劇的な運命を辿った人物として描いた。このような人物は歴史小説の読者にとっては魅力的だったと思われる。そして、この人物像は後に一般的に知られている沖田総司のイメー

ジへ繋がっていくことになった。

四、司馬の新選組作品が後代に与えた影響

四‐一、歴史家からの批判

第二章で述べたように、司馬の作品は実証性が高い。逆にだからこそ、歴史家から「史実と違う」「通説ではない」などの批判が寄せられることもあった。

そもそも歴史と文学のあり方に関しては、一九五〇年代から小説家と歴史家の間に議論がかわされてきた[26]。なぜこのような問題が提起されたのだろうか。歴史小説は人物を通して語るため、読者にとっては分かりやすく、受け入れられやすい。そのため、大衆に与える影響が大きいと考えられる。第二章の第一節でも述べたように、司馬は自分の作品は「小説」であり、「歴史」とは異なると認識しており、小説家であっても歴史を曲げてはいけないという考えの下、歴史を大きく書き換えることはしなかった。しかし、史料から分からない部分に関しては司馬の想像が加えられていることもあった。読者にとっては史実と創作の境界が分かりづらいため、読者が歴史小説を読んだだけで歴史を知ったつもりになってしまうということも有り得る。史実の正確性を問う歴史家から見れば、創作も含まれている司馬の小説を批判したくなるのも頷ける。だからこそ、歴史家は彼等が書く歴史叙述と小説家が書く歴史小説の違いを明らかにする必要があると主張してきたと考えられる。

歴史学者の色川大吉[27]も司馬の小説を批判した人物の一人である。司馬の描いた新選組のイメージは「新国家をつくっていくという維新の指導者らの向日性が投影されすぎている」と批判した。また、「新選組は、あんなにからっとした単純なポジティヴな集団」ではなく、「尊攘派を殺すために集められた殺人者集団」であり、「そういう集団を生み出したというところにこそ、あの時代の歴史の深さがあるのじゃないか」と主張した。この主張に対し、司馬は「いや、それは維新に対するあなたと私の考えの違いだ」と反発し、自身と相手の歴史観の相違を言うと共に、歴史と歴史小説は違うとも主張した。「歴史小説というのは、読んでくれる方に楽しみの娯楽を与えるものであって、読んだら絶望してしまうようなのはだめだ」と言っていた[28]。

史実の正誤を巡って対立するのは勿論だが、司馬と色川に関しては、特に歴史のどこに着目するかということが異なっていたと思われる。司馬の言う「維新に対する考え方の違い」を明らかにすれば、お互いが主張する歴史の意味を知ることができるのではないだろうか。小説家である司馬と歴史家である色川には、それぞれどのような考えがあ

ったのかを踏まえてこの「維新に対する考え方の違い」を考察していきたい。

そもそも、色川は「歴史」と「小説」をどのように捉えているのだろうか。その中でも、人間描写に注目して述べていきたい。色川は「歴史叙述と文学」〈後に「歴史叙述とはなにか」と改題〉（『思想』四〇九号　一九五八年七月掲載）という論文で、もし歴史叙述を真剣に考えるのならば、今読者に歴史像を強力に与えている歴史小説と歴史家の歴史叙述はどう近くなるものなのか、あるいは遠くなるものなのか、そこの違いを明らかにしなければならないのではないかということを提起した。また、人間描写について次のように述べている。

> 文学の形象化のばあい、個性を創造するのに作家たちはよくその人間の心理的、言語的、身体的行動のしかたを克明に追跡する方法をとるが、歴史家が歴史叙述においてする人間描写は、きわめて媒介的であり、総括的であり、思弁的である。
>
> 作家はひとたび、生きた人間の形象に成功したとき、往々その生きはじめた〝人間〟（形象）そのものの持つ法則（自発性）に動かされてゆく。いや、従わないわけにはゆかない。しかし、歴史家にはそうしたことはゆるされない。歴史家に課された自己統御のいましめはかたい。歴史家は重い鎖（くさり）をひきずってゆく。

歴史上の人物を描写するにあたって史実を取り扱う際、小説家には自由な裁量や事情の作為が許されるが、歴史家には許されない。小説家は自由な想像力によって虚構の人物を創造していくことができるが、歴史家は客観的な事実に基づいてその人物がどのような人物であったのかを追求していく。小説家は主観的な要因に注目するのに対し、歴史家は客観的な要因に注目する。司馬は小説を書く際、俯瞰法を用いて登場人物達を見下ろせる超越的な立場に立っていた。歴史上の人物を客観的に捉えるこの俯瞰法はどちらかと言えば歴史家の立場に近いように思われる。司馬の歴史小説が歴史書として受け入れられることがあった理由は、実証性の高さの他にもこのような立場に立っていたことも考えられるのではないだろうか。しかし、この超越的な立場はあくまでも筆者である司馬自身の位置である。第二章の第二節で述べたように、司馬はその人物がどこにいて、何を見て、どのように生きたのかを自分も同じように想像できるように、その「完結した人生」を見下ろしており、注目していたものは「その某の動き、運命、心理、表

情」であった。そして、自分が想像できた世界を登場人物達の視点から描き、各々の心情も含めて書いていった。つまり、司馬は客観的な視点と主観的な視点を両方兼ね備えていたと言えるのではないだろうか。

また、小説に描かれる人物は小説家の想像によってできた産物であり、小説家の主観が入る。そして、小説家が一度歴史上の人物のイメージを形成することができると、以降もそのイメージに引きずられてしまう。つまり、一旦イメージされた歴史上の人物は、実際はどうであったのかは関係なく、そのまま小説の中で定着する。そのイメージは小説家の制御から脱するだけでなく、小説家をも動かしていくのである。それに対し、歴史家は客観的な視点を変えることなく、史料から得られる人物像を追求していく。歴史家は想像することが全く許されないという訳ではないが、史料を基にした推量しかできず、小説家に比べて自由が少ない。だからこそ、小説では一度描かれた人物が作者や読者の中で更に自律性を持つことも有り得るが、歴史研究では一度明らかにされた人物が史料無しで進展するということは有り得ない。つまり、小説に描かれた人物は一人歩きする可能性があるということである。

色川が「新選組は、あんなにからっとした単純なポジティヴな集団ではない」と主張したのは、慶応三年頃の日本は封建国家の体制が崩壊しかかっていたというような、史料を基にした客観的な事実と照らし合わせ、新選組は「尊攘派を殺すために集められた殺人者集団」であると推察したからだろう。ここには、人間の心理という主観的な要因を視野に入れていない。それに対し、司馬は主観的な要因にも着目し、その人物の行動に関して心情を含めて描いていった。更に、「歴史小説というのは、読んでくれる方に楽しみの娯楽を与えるものであって、読んだら絶望してしまうようなのはだめだ」という考えがあったからこそ、読者に良い印象が残るように、新選組のような集団を、無秩序な混沌の時代の中で希望を与えてくれる「ポジティヴな集団」いわゆる「ヒーロー」として描いたのではないだろうか。

以上のように、歴史上の人物を追求する際の両者の立場は全く異なっている。歴史家は客観的な視点から叙述していき、小説家は主観的な視点から描写していく。そのため、各々の考え方に違いが生じてしまったのではないだろうか。これは一概に言えるとは限らないが、少なくとも色川と司馬はそうであったと言える。色川は、新選組を生み出した時代背景にこそ歴史の意味があると着目したのに対し、司馬は新選組の存在そのものに着目した。歴史を取り扱う際に、人物そのものに着目するか、その人物を取り巻

く背景に着目するかということが、司馬と色川の「維新に対する考え方の違い」だったと考えられる。

また、色川は佐高信[29]との対談[30]で「一般の人々の歴史イメージの形成に歴史研究がほとんど影響力を持っていなかった現状を情けない」と思い、「日本の歴史家がもう少ししっかりして立派な歴史叙述を発表できていたら、司馬遼太郎のような小説があんなに影響力を持つこともなかった」と話した。歴史小説が大衆へ絶大な影響を与えていたことは歴史家からの評価より読み取ることができる。ましてや、司馬の作品は特に影響力が大きかったようである。客観的に述べられた文書と登場人物の主観的な視点から書かれた文書を読むにあたって、読者にとっては後者の方が感情移入しやすい。更に司馬が描いた新選組は、読者が絶望することのないように、共感できるように描き出された。史実の正確性を持つのは歴史叙述であるが、一般的に受け入れやすかったのは歴史小説であったと考えられる。

司馬の小説では、新選組は「ヒーロー」として描かれた。そのため、歴史家からは批判の対象となってしまったが、歴史小説の読者からは支持を得ていた。では、大衆に受け入れられた司馬の歴史小説は、後代に具体的にどのような影響を与えたのだろうか。

四・二、大衆への影響

新選組は昭和期に大衆へ広まってから今日に至るまで人気を博している。昭和初期の新選組のイメージは「勤王の志士にむらがる野狼のごとき人斬り集団[31]」であったが、一九二八年に子母澤寛の『新選組始末記』が刊行されてその評価に非を唱え、更に一九六〇年代の司馬の新選組作品で昭和初期のイメージが払拭された。佐幕派の幕臣でありながらも新選組の立場を保とうと近藤勇が悩む姿を見ても、新選組がただの「人斬り集団」ではなかったことが読み取れる。ちなみに、一九五〇年代まで新選組の主役といえば、主に近藤であり、土方歳三や沖田総司らは引き立て役に過ぎなかった。しかし、一九六〇年代には脇役に過ぎなかった他の隊士達も注目されるようになり、新選組はテレビドラマや舞台、映画などに取り上げられ、一つのブームを巻き起こした[32]。初めは武士でなく農家の息子だった近藤や土方らに一種の身近さを感じ、江戸の試衛館道場で剣の腕を磨いて、やがて京都という動乱の世界へ乗り込んでいった姿には大衆も胸を踊らされただろう。そして、『新選組血風録』や『燃えよ剣』などの司馬の新選組作品が世に出たこともブームの要因の一つとされている[33]。

ところで、なぜ司馬の新選組作品はこのように大衆に受け入れられたのだろうか。

第一に、司馬の歴史小説に登場する人物が魅力的であるからだと考えられる。第四章の第一節で述べたように、歴史家による叙述よりも歴史小説の方が大衆のイメージに結び付く傾向が強い。歴史小説は人物を通して歴史を述べたものであるので、読者にとっては非常に読みやすいものとなっている。更に司馬の小説は「余談」のような手法により、司馬独特の歴史的・倫理的解釈を入れて個性豊かな人物を描き出している。『新選組血風録』でも同様に、新選組隊士一人一人に焦点を当てて個々の人間性を生かして描いていった。また、司馬は読者が絶望しないように、楽しめるような小説を書いていた。新選組という実在した人物達を、それぞれ大衆受けするような人間味溢れる魅力的な人物として描いたため、司馬の新選組作品は大衆から支持を得たのではないだろうか。

第二に、時代が関係していたからだと考えられる。新選組を主人公とした司馬の作品では、一九六二年五月からの『新選組血風録』の連載を筆頭に、同年八月に「理心流異聞」が発表され、同年十一月には『燃えよ剣』の連載が始まった。一九六〇年代といえば、高度経済成長期であり、東京オリンピックが開催されて日本が盛り上がった時期であった。一方、当時の文壇文学は、色川によれば「非常に内向していて何となく薄暗くて、とてもじゃないが大衆性がなかった」[34]という。そのような時期に、歴史上の人物がヒーローとして活躍していく司馬の小説は、読者にとって希望を与え、共感しやすいものだったのではないだろうか。

そして、特に注目したい点が、『新選組血風録』の「沖田総司の恋」が読者の絶大な共感を呼び、引き立て役に過ぎなかった沖田総司という青年剣士が人気となっていった[35]ことである。この件に関して、北山章之助[36]が司馬に沖田の人気の火付け役として何か話してほしいと頼んだとき、「かんべんしてくれよ」と言われたという。「沖田総司の作られた虚像は、映画スターの虚像のようなもので話すべきこともない」ということのようだ。北山は「ある作家の作り出した歴史上の人物像が、一人歩きしていつの間にか大衆化社会のヒーローに成長するというのは、いかにも現代らしい面白い現象でした」と評価した[37]。

それでは、歴史上の人物が一人歩きして大衆化社会のヒーローになったと称される沖田のイメージとはどのようなものだったのだろうか。本節では、小説やテレビなどのメディアを通して伝わる一般的な沖田のイメージを追求していきたい。

沖田総司は幾多の新選組小説やドラマで「透明なイメージの好青年」「薄幸の天才剣士」として描かれることが多い。NHKの大河ドラマ『新選組！』[38]での沖田総司役は俳優

の藤原竜也が演じた。このキャスティングに関して、『新選組！』の時代考証を担当した山村竜也[39]は「少年っぽいイメージの沖田にはぴったりだ[40]」と話した。大人ばかりの新選組の中でまだ幼さが残っている沖田の存在を際立たせ、子供っぽい純粋さを上手く表現しているということであろう。また、病気のイメージも欠かせない。池波正太郎[41]と綱淵謙錠[42]と今井幸彦[43]が鼎談した際[44]、今井は沖田を「『不如帰（ほととぎす）』[45]の男性版じゃないか」と例えた。結核を患い、生きたいという志半ばで病死してしまう沖田は、徳冨蘆花の『不如帰』のヒロインの浪子と共通する。また、喀血しながらも敵を斬りつけ、武士として生きようとする沖田の姿は「啼いて血を吐くほととぎす」のようだと言える。江戸期や明治期では、結核に対する有効な治療法が見つかっていなかったため、結核は「不治の病」とされていた。だからこそ、沖田は「結核」＝「短命」＝「薄幸」というイメージに繋がっていったと考えられる。更に池波はこの鼎談で、沖田に関して「若くて、強くて、純粋で、またやさしくて、最後は悲劇的に死ぬ。これがうけないわけはないと思うな」と言っていた。沖田にしか見られないこれらの要素は大衆受けしやすく、小説やドラマでは魅力的な人物として印象強く残る。だからこそ、沖田は「透明なイメージの好青年」「薄幸の天才剣士」のようなイメージが定着したのではないだろうか。

このイメージは司馬の作品で描かれた沖田総司の人物像と酷似している。第三章の第二節で述べたように、沖田はふしぎな、子供のような風貌をした天才剣士で、誰からも好かれる好青年であった。更に、新選組隊士の中でも異質で一際目立つ存在であり、殺戮集団の中にいたとは考え難い純粋な若者であった。『新選組血風録』では「沖田総司の恋」と「菊一文字」という話で、淡い恋心や死を間近にした沖田のエピソードが書かれている。恋した娘のことをただ見ているだけでよいという無欲さや、死期が近づくにつれて笑顔が透き通るようになってきた姿は「透明なイメージ」や「薄幸」を読者に印象付けさせた。もちろん、この沖田のイメージは史実から派生した部分もあることは確かである。しかし、河合敦[46]によれば、司馬の新選組作品によって「純朴な天才剣士という総司像が、完全に世間一般に定着[47]」したという。更に、司馬の新選組作品が刊行された時期に新選組ブームが起き、小説だけでなく、その小説を基にした映画やテレビドラマ[48]が大衆に受け、沖田の人気を集めた。司馬の小説に描かれた沖田の人物像の影響も少なからずあったと言うことができる。

司馬の新選組作品は、かつての「佐幕派の人斬り集団」という悪いイメージを取り払い、新選組は幕臣側の倫理に

基づいて活躍した「ヒーロー」として印象付けさせた。更に、新選組ブームを巻き起こし、実像がはっきりとしていなかった沖田総司の人物像を確立させ、大衆に定着させた。沖田の人物像の確立については司馬が意図したものではなかったが、結果として司馬の小説の影響も大きかった。したがって、これらの大衆に与えた影響は司馬の功績と言うことができるのではないだろうか。

五、おわりに

司馬の歴史小説は、歴史の様々なゴシップを多用し、現代からの解釈を織り込んで過去の人物達を素描していくものだった。この独自の歴史論を展開する随筆風の小説は、それまでの歴史小説には見られなかった形態であった。

そもそも司馬が歴史を小説の題材に選んだ理由は、人間の「完結した人生」を見下ろすことを好んでいたからである。しかし、小説を書くためにはその「完結した人生」つまり「歴史」を知らなければならなかった。歴史上の人物が生きていた日常を自分も同じように想像できるよう、そして歴史家の領域である「歴史」を曲げることがないよう、「小説」でありながらも「歴史」を重視していたと考えられる。

新選組作品については、子母澤寛の影響を受けており、司馬は子母澤の新選組三部作を参考にして、独自の新選組の人物像を作り上げながら描いていった。

特に沖田総司に関しては、子供のような純粋さを持つ一方で人を斬る残酷さを兼ね備えた「ふしぎな若者」として描いた。新選組の中でも異質な存在として、更に悲劇的な運命を辿っていく沖田は、大衆から多くの人気を呼んだ。

しかし、この新選組作品は読者から支持を得た一方で、歴史家からは批判の対象とされた。歴史と文学の対立は、史実の正誤を巡って起こりうると思われるが、客観的な立場から歴史を見る歴史家と主観的な立場から歴史を見る小説家だからこそ、起こりうるとも考えられる。歴史上の人物を取り上げるにあたって、その人物そのものに歴史の意味を考えるか、その人物を取り巻く背景にこそ歴史の意味を考えるかは、各々異なる。司馬は前者の立場に立ち、新選組の存在そのものに着目して、彼等を読者に希望を与えられるような「ヒーロー」として描いた。

こうして大衆に受け入れられた司馬の新選組作品は、世間で新選組ブームを引き起こし、更に大衆が思い描く新選組の人物像の形成に影響を与えた。特に史料が少なく、実体が明らかにされていなかった沖田総司を小説に描いて世間一般に広めたことは、本人が意図したものではなかったにしろ、結果として一般的な沖田総司のイメージとして定

着させることに繋がった。実在したものの、実像がはっきりとしていなかった人物を小説という媒体を通して大衆へ広めた司馬の功績は大きいと言える。

注

1　『ペルシャの幻術師』は初めて司馬遼太郎というペンネームで書かれたデビュー作で、一九五六年に第八回講談倶楽部賞に応募して当選し、『講談倶楽部』一九五六年五月号で発表された。囚われの美女ナンをめぐって、蒙古の将軍大鷹汗（シンホルハガン）ボルトルとその命を狙う幻術師アッサムの死闘を描いた物語である。

2　「理心流異聞」は『文芸朝日』一九六二年八月号に掲載された。剣術の天然理心流免許皆伝者の沖田総司がまだ江戸にいた頃、松月派柳剛流の剣客平岡松月斎の騙し討ちに合って一度は逃げ帰った。しかし、新選組員となった沖田が京都で再び松月斎に出会った際、決着をつけたという話である。

3　『燃えよ剣』は『週刊文春』の一九六二年十一月一九日号から一九六四年三月九日号まで連載された。幕末に新選組副長として壮絶な生き方をした土方歳三の青年期から死までを描いた物語である。

4　山崎一穎『森鷗外　国家と作家の狭間で』（新日本出版社二〇一二年）「第六章　晩年の動き」の中の「（一）歴史小説」に拠る。

5　日本近代文学館編『日本近代文学大事典　第三巻』（講談社一九七七年）の「森鷗外」（長谷川泉）の項目に拠る。

6　森鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」は一九一五年一月に『心の花』で発表された。史実を尊重する「歴史其儘」と史実を変更させる「歴史離れ」について述べている。歴史に縛られてしまう鷗外は、この評論の中で「歴史離れ」をしてみようと試みたが、結局登場人物の年齢や官位、政治体制との整合などを考慮せざるを得ず、「歴史離れ」はしきれなかった。

7　注4に同じ。

8　色川大吉「歴史叙述と文学」〈後に「歴史叙述とはなにか」と改題〉（『思想』四〇九号　昭和三十三年七月）から引用。

9　子母澤寛（一八九二‐一九六八）は、読売新聞社に入社後、東京日日新聞社に移り、新聞記者をしながら新選組関係の故老の話を聞いてまとめ、『新選組始末記』、『新選組遺聞』、『新選組物語』の「新選組三部作」を出版した。

10　『新選組始末記』「一、近藤勇の道場」から引用。

11　『新選組遺聞』「壬生屋敷」の中の「近藤勇」から引用。

12　『新選組始末記』「二、勇の家、歳三の家」から引用。

13　注10に同じ。

14　『新選組遺聞』「壬生屋敷」の中の「土方歳三、沖田総司」から引用。

15　『新選組物語』「新選組」の中の「一一、黒い猫」から引用。

16　『新選組物語』「隊士絶命記」から引用。

17　『新選組始末記』「四七　隊士ぞくぞく斃る」から引用。

18　注14に同じ。

19　『新選組始末記』「八　水府脱藩芹沢鴨」から引用。

20 『新選組始末記』「三七　池田屋事件」から引用。
21 注16に同じ。
22 注17に同じ。
23 河合敦『沖田総司と新選組隊士』（ナツメ社　二〇〇四年）「第二章　沖田総司の生涯」の中の「総司の性格」に拠る。
24 菊池明『新選組一番組長　沖田総司の生涯』（新人物往来社　二〇一三年）の「序章　沖田家」の中の「沖田家の記録」から引用。
25 『新選組遺聞』「勇の屍を掘る」の中の「恋の沖田」から引用。
26 成田龍一『司馬遼太郎の幕末・明治「竜馬がゆく」と「坂の上の雲」を読む』（朝日新聞社　二〇〇三年）「第一章　いま、司馬遼太郎を読むこと」の中の「『歴史』と『文学』という議論」に拠る。
27 色川大吉（一九二五・）は歴史家で、民衆思想史研究の第一人者である。
28 この色川と司馬の議論は、色川と佐高信の対談「司馬遼太郎批判　歴史のうねりを描くとは」（『世界』一九九八年一月号掲載）で明かされている。司馬と色川のこの対談記録がないため、おそらく色川が司馬と会って話したときの内容を佐高との対談で初めて公表したと推察される。
29 佐高信（一九四五・）は評論家である。政治や経済、文学などを批評対象としており、司馬を批判している。
30 色川と佐高の対談「司馬遼太郎批判　歴史のうねりを描くとは」（『世界』一九九八年一月号掲載）に拠る。
31 『新選組血風録』（中央文庫　一九九六年）に収録されている綱淵謙錠の解説に拠る。
32 注23に同じ。
33 注31に同じ。
34 注30に同じ。
35 注23に同じ。
36 北山章之助（一九三七・）はＮＨＫのプロデューサーとして、多くの歴史番組を手掛けてきた。
37 北山章之助『手掘り司馬遼太郎』（日本放送出版協会　二〇〇三年）の中の「殺人集団の組織と群像―『燃えよ剣』と『新選組血風録』」に拠る。
38 大河ドラマ『新選組！』は二〇〇四年一月十一日から十二月十二日にかけてＮＨＫで放送され、原作・脚本は三谷幸喜が手掛けた。近藤勇を主人公とした新選組を題材としている。
39 山村竜也（一九六一・）は歴史作家であり、主に新選組を題材とした作品を出版している。また、大河ドラマや時代劇の時代考証も担当している。
40 西口徹編『文藝別冊　総特集　新選組人物誌』（河出書房新社　二〇〇三年）に掲載された山村竜也へのインタビュー「ＮＨＫ大河ドラマの時代考証」から引用。
41 池波正太郎（一九二三・一九九〇）は戦後を代表とする歴史小説家である。戦国・江戸時代を舞台にしたものを手掛け、幾つもの賞を受賞した。
42 綱淵謙錠（一九二四・一九九六）は歴史小説家、随筆家である。一九七一年に中央公論社を退社した後に執筆活動を始め、翌年には『斬』で第六七回直木賞を受賞した。

43　今井幸彦（一九一八‐一九八一）は坂本竜馬を暗殺した容疑者の一人として疑われている幕臣の今井信郎（一八四一‐一九一八）の孫である。

44　半藤一利編『文藝春秋臨時増刊号　目で見る日本史　明治維新』（文藝春秋　一九七三年一月）に掲載された鼎談「新選組はゆく」に拠る。

45　『不如帰』は一八九八年十一月二十九日から一八九九年五月二十四日にかけて『国民新聞』に掲載された徳冨蘆花（一八六八‐一九二七）の小説である。結核を患いながら明治の家族関係の柵に苦しんだヒロインの浪子の生涯を描いた作品である。

46　河合敦（一九六五‐）は歴史作家、歴史研究家である。歴史書の執筆活動だけでなく、歴史評論家としてテレビ番組にも出演している。

47　注23に同じ。

48　『新選組血風録』は過去に五度映像化された。一九六三年五月十二日には小沢茂弘監督、笹原和夫・加藤泰脚本の映画『新選組血風録　近藤勇』が公開され、一九九九年十二月十八日には『新選組血風録』の中の「前髪の惣三郎」「三条磧乱刃」を基にした大島渚監督・脚本の映画『御法度』が公開された。テレビドラマはNET（現在テレビ朝日）制作、河野寿一・佐々木康・高見育男監督、結束信二脚本の『新選組血風録』（一九六五年七月十一日から一九六六年一月二日まで放送）、テレビ朝日制作、工藤栄一・松尾明典・斉藤光正・舛田利雄・上杉尚祺監督、吉田剛・岡本克己・塙五郎脚本の『新選組血風録』（一九九八年十月八日から十二月三十日まで放送）、NHK制作、渡邉睦月・川上英幸脚本、清水一彦・西谷真一・佐々木善春演出の『新選組血風録』（二〇一一年四月三日から六月十九日まで放送）の三作品が放送された。更に『燃えよ剣』も四度映像化された。一九六六年十一月十二日には市村泰一監督、加藤泰・森崎東脚本の『燃えよ剣』が公開された。テレビドラマは東京12チャンネル（現在テレビ東京）制作、工藤栄一脚本、三枝孝栄演出の『燃えよ剣』（一九六六年一月十四日から三月二十五日まで放送）、NET制作、河野寿一・松尾正武監督、結束信二脚本の『燃えよ剣』（一九七〇年四月一日から九月二十三日まで放送）、テレビ東京制作、山本和夫監督、長坂秀佳脚本の『燃えよ剣』（一九九〇年一月五日、一月六日放送）の三作品が放送された。

【参考文献】

司馬遼太郎『新選組血風録　新装版』角川書店　二〇〇三年
司馬遼太郎『新選組血風録』中公文庫　一九九六年
司馬遼太郎『司馬遼太郎歴史の中の邂逅4　勝海舟～新選組』中央公論新社　二〇一〇年
司馬遼太郎『歴史と小説』集英社　二〇〇六年
司馬遼太郎『手掘り日本史』文藝春秋　二〇一二年
司馬遼太郎『司馬遼太郎が考えたこと3』新潮社　二〇〇五年
司馬遼太郎『司馬遼太郎対話選集2』文藝春秋　二〇〇二年
志村有弘編『司馬遼太郎事典』勉誠出版　二〇〇七年
子母澤寛『新選組始末記』中央公論社　一九九六年
子母澤寛『新選組遺聞』中央公論社　一九九七年

子母澤寛『新選組物語』中央公論社　一九九七年
色川大吉『色川大吉著作集1　新編　明治精神史』筑摩書房　一九九五年
松本勝久『司馬遼太郎書誌研究文献目録』勉誠出版　二〇〇四年